

エレギア語文法書

目次

第1章 序章	5
1.1 はじめに	5
1.2 言語の概要	5
第2章 音韻体系	7
2.1 子音の発音	7
2.2 母音の発音	8
第3章 書記体系	9
3.1 文字体系	9
3.2 標準字体	9
3.3 約物	10
第4章 子音の役割	11
4.1 単語構造	11
4.2 子音概念	11
4.3 語根	12
4.4 語根概念	12
4.5 接頭辞	12
4.6 接尾辞	12
第5章 母音の役割	15
5.1 前置格	15
5.2 後置格	15
5.3 複合格	16
5.4 接頭辞格	17
5.5 接尾辞格	17
5.6 品詞	18
第6章 文構造	19
6.1 基本文型	19
6.2 複文と従属文	19
6.3 否定文と疑問文	19
6.4 強調と焦点	19

第 7 章	特殊構文	21
7.1	受動態	21
7.2	能動態と中動態	21
7.3	命令文	21
第 8 章	辞書	23
8.1	辞書の使用方法	23
8.2	新語彙の生成規則	23
第 9 章	付録	25
9.1	重要な語句	25
第 10 章	活用形一覧	27
10.1	附詞活用形	27
10.2	動詞活用形	27
10.3	容詞活用形	28
10.4	助詞活用形	29
10.5	副詞活用形	29
10.6	名詞活用形	30

第1章

序章

1.1 はじめに

1.1.1 この文法書について

本書はエレギア帝国帝立大学言語学研究所によって刊行された辞典、Cinarwziqili Beruvwdikwtw イナールズィーリ・ベルーヴディクトの巻末資料 Cinarwziqili Gwlamwdufunw イナールズィーリ・グラームドウフーンを日本語に翻訳したものである。

本辞典および文法書の翻訳にあたり、エレギア帝国帝立大学言語学研究所の皆様から多大なるご支援と貴重な助言を賜った。ここに深く感謝の意を表する。

1.2 言語の概要

エレギア語は、砂漠の中のオアシス都市を中心に成立した帝国、エレギア帝国の公用語である。

その文法や発音は、ハナス・ピスピ共和連合時代に話されていたピスピ語から殆ど変化しておらず、多様な遺物が当時のまま解読可能である。

帝国議会によって制定された数多くの書体は、近年オープンソースのデジタルフォントとして整備され、帝国公式のウェブサイトにて公開されている。

第2章

音韻体系

2.1 子音の発音

子音文字は調音部位を象った形状を持ち、音声学的な特徴を視覚的に表現している。

2.1.1 子音発音図表

子音発音表

表 2.1 子音表

	喉音		舌先音		唇音	
	弱震音	強震音	弱震音	強震音	弱震音	強震音
上舌音	k /k/	g /g/	t /t/	d /d/	s /s/	z /z/
中舌音	q /χ/	c /tʃ/	r /r/	l /l/	p /p/	b /b/
下舌音	h /h/	x /x/	f /f/	v /v/	m /m/	n /n/

子音発音図

2.1.2 子音発音説明

子音の発音に就いての説明

- k この文字は/k/という発音であることを指す。
- g この文字は/g/という発音であることを指す。
- t この文字は/t/という発音であることを指す。
- d この文字は/d/という発音であることを指す。
- s この文字は/s/という発音であることを指す。
- z この文字は/z/という発音であることを指す。

図 2.1 子音発音図

図 2.2 母音発音図

- q この文字は/?/という発音であることを指す。
- c この文字は/?/という発音であることを指す。
- r この文字は/r/という発音であることを指す。
- l この文字は/l/という発音であることを指す。
- p この文字は/p/という発音であることを指す。
- b この文字は/b/という発音であることを指す。
- h この文字は/h/という発音であることを指す。
- x この文字は/x/という発音であることを指す。
- f この文字は/f/という発音であることを指す。
- v この文字は/v/という発音であることを指す。
- m この文字は/m/という発音であることを指す。
- n この文字は/n/という発音であることを指す。

2.2 母音の発音

この言語において母音符号の付与は限定的であり、特に初学用や幼児用に母音符号を記述することもある。

2.2.1 母音発音図表

母音発音表

表 2.2 母音表

非円唇母音	a /a/	e /e/	i /i/
円唇母音	o /o/	u /u/	w /θ/

母音発音図

2.2.2 母音発音説明

母音の発音に就いての説明

- a この文字は/a/という発音であることを指す。
- e この文字は/e/という発音であることを指す。
- i この文字は/i/という発音であることを指す。
- o この文字は/o/という発音であることを指す。
- u この文字は/u/という発音であることを指す。
- w この文字は無母音であることを指す。

第3章

書記体系

3.1 文字体系

ピスピ文字 先述のエレギア文字の祖先に該当する書記体系。古代文明ハナス・ピスピで広く用いられていた記録が残っており、現在では伝統的な装飾や詩歌などに用いられている。

エレギア文字 現行のエレギア語表記に広く用いられる文字。複数の字体があり、地域差が甚だしい書記体系とも取ることができるが、拡張文字も存在し、遍く使われ得る書記体系と銘打たれることもある。

3.2 標準字体

エレギア語の書記体系には、地域や時代によって異なる字体が存在する。これらの字体は、エレギア語の文化や歴史を反映している。

エレギア語に用いられる標準字体

コディート体 kodito

エレギア帝国の工業革命期に使用された工業用規格書体である。後述のシルキ体の書記方向を判読性向上のために線形状にしている。

レクータ体 lekuta

ロゼーグ体 lozegw

マキーナ体 makina

エレギア帝国で最初期に用いられたコンピュータ用フォントである。ビットマップフォントの一種で、低解像度のディスプレイに最適化されている。

ピスピ体 piswpi

ハナス・ピスピ共和連合時代に用いられた書体である。Comwnnwnaqanw オムンナーンという神が創造したと伝説上では語られている。

ポルゴ体 polwgo

シルキ体 silwki

スリーヴェ体 sulive

ハナス・ピスピ共和連合時代に用いられた書体である。Sulive スリーヴェというのは、ピスピ語で“流出させる”という意味を持つ動詞で、ピスピ体の筆記体として

図 3.1

図 3.2

用いられている。

ハヴァーニ体 xavani

エレギア帝国と東方の大帝国 Xavanw ハヴァーンの国交開通に伴って開発された書体である。何があっても揺るがないようにという意図が図形に込められている。

ヘサーダ体 xesada

ヒディーリ体 xidili

エレギア帝国内での Xavanw ハヴァーン文化の流行に即して制作された書体。Xavanw ハヴァーンにて吉祥きっしょを表す正八角形を基調としている。 xidili ヒディーリとは Xavanw ハヴァーン にて吉祥きっしょを表す言葉である。

ゾソーク体 zosokw

エレギア帝国第五代目皇帝 Pwratuluqusw Cinalwgqilw プラトゥルース・イナールズィール の皇后、Camiricaqale Zosokw アミリアーレ・ゾソークが考案した書体。後にこれはエレギア帝国の教育用標準書体として制定された。

3.3 約物

エレギア語において、約物は主に文構造を明確にするために使用される。

約物の使用法

エレギア語で用いられる約物の一覧と役割を示す。

大休止符 .

強中休止符 :

弱中休止符 ;

小休止符 ,

感嘆符 !

疑問符 ?

右方符

左方符

第4章

子音の役割

4.1 単語構造

基本単語構造

エレギア語の基本単語構造は $C_1V_1C_2V_2C_3V_3$ となる。これは原型となる単語のことであって、活用形などは後述する接辞の節にて単語構造が拡張される。

4.2 子音概念

語根はエレギア語において最も重要な単語の概念を指示する水先案内人の様な存在である。後世の学者たちが単語を区別するために子音概念を明瞭化させた。そのために子音概念を理解することが重要である。

子音概念表

表 4.1 子音概念表

	喉音		舌先音		唇音	
	弱震音	強震音	弱震音	強震音	弱震音	強震音
上舌音	k 剥離	g 癒着	t 乖離	d 同一	s 肉体	z 精神
中舌音	q 空白	c 物質	r 過去	l 未来	p 鎮静	b 高揚
下舌音	h 受動	x 能動	f 創造	v 破壊	m 流動	n 固定

子音概念図

子音の概念に就いての説明

k 剥離はくりの概念を持つ。

g 癒着ゆちゃくの概念を持つ。

図 4.1 子音概念図

図4.2 接頭辞図

- t 乖離かいりの概念を持つ。
- d 同一どういつの概念を持つ。
- s 肉体にくたいの概念を持つ。
- z 精神せいしんの概念を持つ。
- q 空白くうはくの概念を持つ。
- c 物質ぶっしつの概念を持つ。
- r 過去かこの概念を持つ。
- l 未来みらいの概念を持つ。
- p 鎮静ちんせいの概念を持つ。
- b 高揚こうようの概念を持つ。
- h 受動じゅどうの概念を持つ。
- x 能動のうどうの概念を持つ。
- f 創造そうぞうの概念を持つ。
- v 破壊はかいの概念を持つ。
- m 流動りゅうどうの概念を持つ。
- n 固定こていの概念を持つ。

4.3 語根

語根は単語の基本となる部分であり、語根に接辞を付けることで意味を変化させることができる。

$C_1 C_2 C_3$

4.4 語根概念

子音概念を三つ繋げることで語根概念が形成される。

4.5 接頭辞

$C_{\text{prefix}} C_1 C_2 C_3$

4.5.1 接頭辞図表

接頭辞表

接頭辞図

4.6 接尾辞

$C_1 C_2 C_3 C_{\text{suffix}}$

図 4.3 接尾辞図

図 4.4 接周辞図

4.6.1 接尾辞図表

接尾辞表

接尾辞図

4.6.2 接周辞

$C_{\text{prefix}}C_1C_2C_3C_{\text{suffix}}$

4.6.3 接周辞図表

接周辞表

接周辞図

第5章

母音の役割

エレギア語の格には否格、与格、属格、対格、主格、流格が存在する。

5.1 前置格

第一子音 (C_1) に附属する第一母音 (V_1) の種別によって語根格が決定される。

5.1.1 前置格図表

前置格表

前置格図

前置格に就いての説明

否格 C_1 の概念を否定させる格。

与格 C_1 の概念を指向させる格。

属格 C_1 の概念を包含させる格。

対格 C_1 の概念を標的とする格。

主格 C_1 の概念を起点とする格。

流格 C_1 の概念を流出させる格。

5.2 後置格

第二子音 (C_2) に附属する第二母音 (V_2) の種別によって語根格が決定される。

5.2.1 後置格図表

後置格表

後置格図

後置格に就いての説明

図 5.1 前置格図

図 5.2 後置格図

図 5.3 複合格図

- 否格** C_2 の概念を否定させる格。
与格 C_2 の概念を指向させる格。
属格 C_2 の概念を包含させる格。
対格 C_2 の概念を標的とする格。
主格 C_2 の概念を起点とする格。
流格 C_2 の概念を流出させる格。

5.3 複合格

前置格 (V_1) と後置格 (V_2) の組み合わせの種別によって語根格が決定される。

5.3.1 複合格図表

複合格表

複合格図

5.3.2 複合格の説明

複合格に就いての説明

否格 否否格

否与格

否属格

否対格

否主格

否流格

与格 与否格

与与格

与属格

与対格

与主格

与流格

属格 属否格

属与格

属属格

属対格

属主格

属流格

対格 対否格

対与格

対属格

図 5.4 接頭辞格図

	対対格
	対主格
	対流格
主格	主否格
	主与格
	主属格
	主対格
	主主格
	主流格
流格	流否格
	流与格
	流属格
	流対格
	流主格
	流流格

5.4 接頭辞格

接頭辞子音 (C_{prefix}) に附属する接頭辞母音 (V_{prefix}) の種別によって接辞格が決定される。

5.4.1 接頭辞図表

接頭辞格表

接頭辞格図

5.4.2 接頭辞格説明

接頭辞格に就いての説明

否格 C_{prefix} の概念を否定させる格。

与格 C_{prefix} の概念を指向させる格。

属格 C_{prefix} の概念を包含させる格。

対格 C_{prefix} の概念を標的とする格。

主格 C_{prefix} の概念を起点とする格。

流格 C_{prefix} の概念を流出させる格。

5.5 接尾辞格

接尾辞子音 (C_{suffix}) に附属する接尾辞母音 (V_{suffix}) の種別によって接辞格が決定される。

図 5.5 接尾辞格図

図 5.6 品詞分類図

5.5.1 接尾辞格図表

接尾辞格表

接尾辞格図

接尾辞格に就いての説明

否格 C_{suffix} の概念を否定させる格。

与格 C_{suffix} の概念を指向させる格。

属格 C_{suffix} の概念を包含させる格。

対格 C_{suffix} の概念を標的とする格。

主格 C_{suffix} の概念を起点とする格。

流格 C_{suffix} の概念を流出させる格。

5.6 品詞

エレギア語の品詞には附詞、動詞、容詞、助詞、副詞、名詞が存在する。

5.6.1 品詞分類図表

品詞分類表

品詞分類図

5.6.2 品詞分類説明

品詞に就いての説明

附詞 前置修飾して意味を限定させる品詞である。

動詞 動作の意味主体を表す品詞である。

容詞 物事の状態を表す品詞である。

助詞 後置修飾して意味を限定させる品詞である。

副詞 動作の意味周辺を表す品詞である。

名詞 物事の概念を表す品詞である。

第 6 章

文構造

6.1 基本文型

主語、述語、目的語の配置

6.2 複文と従属文

複文の構成、従属節の使い方

6.3 否定文と疑問文

否定や疑問の表現方法

6.4 強調と焦点

文の中で特定の部分を強調する方法

第7章

特殊構文

7.1 受動態

受動態の形成と使用法

7.2 能動態と中動態

能動態、中動態の説明と使用例

7.3 命令文

命令文の形成と使用法

第8章

辞書

8.1 辞書の使用方法

語彙の検索方法や辞書の構成

エレギア語の辞書では主に語根からの派生形を検索する形式となっている。

8.2 新語彙の生成規則

新しい語彙を作る規則

第9章

付録

9.1 重要な語句

エレギア語で頻出する語句を提示する。

9.1.1 頻出語句

正式な挨拶 Kotiva!コティーヴア！

くだけた挨拶 Xoqoci!ホーイ！

9.1.2 神聖語句

第 10 章

活用形一覧

10.1 附詞活用形

10.1.1 附詞活用図表

附詞の格変化、数、定及び不定の概念など

附詞活用表

附詞活用図

10.1.2 附詞活用説明

附詞の活用に就いての説明

剥離

癒着

乖離

同一

肉体

精神

空白

物質

過去

未来

鎮静

高揚

10.2 動詞活用形

10.2.1 動詞活用図表

動詞の活用、時制、態、相など

図 10.1 附詞活用図

図 10.2 動詞活用図

図 10.3 容詞活用図

動詞活用表**動詞活用図****10.2.2 動詞活用説明**

動詞の活用に就いての説明

相 受動相

能動相

創造相

破壊相

流動相

固定相

時制 空白形

物質形

過去形

未来形

鎮静形

高揚形

10.3 容詞活用形**10.3.1 容詞活用図表**

容詞の格変化、数、定及び不定の概念など

容詞活用表**容詞活用図****10.3.2 容詞活用説明**

容詞の活用に就いての説明

受動

能動

創造

破壊

流動

固定

剥離

図 10.4 助詞活用図

癒着
乖離
同一
肉体
精神

10.4 助詞活用形

10.4.1 助詞活用図表

助詞の機能と用法

助詞活用表
助詞活用図

10.4.2 助詞活用説明

助詞の活用に就いての説明

剥離
癒着
乖離
同一
肉体
精神
空白
物質
過去
未来
鎮静
高揚

10.5 副詞活用形

10.5.1 副詞活用図表

副詞の格変化、数、定及び不定の概念など

図 10.5 副詞活用図

図 10.6 名詞活用図

副詞活用表**副詞活用図****10.5.2 副詞活用説明**

副詞の活用に就いての説明

相 受動相

能動相

創造相

破壊相

流動相

固定相

時制 空白形

物質形

過去形

未来形

鎮静形

高揚形

10.6 名詞活用形**10.6.1 名詞活用図表**

名詞の格変化、数、定及び不定の概念など

名詞活用表**名詞活用図****10.6.2 名詞活用説明**

名詞の活用に就いての説明

受動

能動

創造

破壊

流動

固定

剥離

癒着

乖離

同一

肉体

精神